

『新千歳市史』編さんだより

志古津

過去からのメッセージ

Message From the past

HOKKAIDO
CHITOSE-CITY

千歳音頭（昭和二十五年）
作詞 北郷雪夫
補作詞 東辰三
作曲 東辰三
（一番）
銀のネ 銀の翼が世界をつなぐ ヨイヨイ
空の港も ひらけて晴れて
今日もあちらの 今日もあちらの
ホイホイホイ お客様
ソレ チトセヨイトコ
アリヤリヤン リヤン
シコツ ヨイヨイ ヨーイヤナ





現・湖畔広場のバス停留所に駐車する観光バスと翠明閣の看板（昭和28年撮影）

王子製紙苫小牧工場専用鉄道（S26廃止）の支笏湖鉄橋と湖畔駅、千歳鉱山東岸埠頭の水制が見える。昭和25年、千歳音頭は停留所右手の会場で披露された。シラッチセは、対岸の千歳鉱山軌道（S27廃止）川口事務所駅－八千代駅間三哩の沢・右岸側にあった。

志古津 第14号

目次

『ちとせ歴史ものがたり』『バランス』秘話

..... 渡辺敏子 1

シラッチセに残されたアイヌ文化

..... 田村俊之 6

千歳音頭と支笏湖

..... 守屋憲治 13

あとがき

表紙の写真

（小） 長見義三は千歳を知る会有志と熊の送り場を訪れた際、「明治元年、仙台藩白老陣屋の藩士は小樽から仙台に戻る時、白老と小樽の直線上にあるこのシラッチセで一泊した」と語った（M）。

（大） 湖岸に設営された会場で千歳音頭を披露する苫小牧観光まつり移動演芸班の芸妓（昭和25年9月23日 支笏湖畔 北海道新聞社撮影）

※ 本文中「ママ」は、原文のまま引用したことを表している。

『ちとせ歴史ものがたり』『バランス』秘話

渡 辺 敏 子

千歳市民文芸の会事務局長

平成二十一年十二月、長見有方氏が『ちとせ歴史ものがたり』を出版した。これは千歳市の『広報ちとせ』に、昭和五十二年六月号から五十八年一月号まで、二三回にわたって掲載された作家長見義三の「市史つれづれ」を収録したものである（長見義三『増補千歳市史』編者）。

長見義三を偲ぶ会・白雲木祭に関わった人々、約一〇〇人には有方氏から直接送られた。希望者には提供したいとのことで、北海道新聞社千歳支局、千歳民報社が窓口となり約一五〇冊が配付された。その後、各方面からの希望者が多く、合せて三〇〇冊余が市民に配られた。

『ちとせ歴史ものがたり』は前編に「市史つれづれ」を、後編に小編・エッセイほか三編を収録している。



写真1 長見義三
明治41（1908）年～平成6（1994）年

『ちとせ地名散歩（S 51北海道新聞社）』、『ちとせのウエペケレ（H 6響文社）』、『ちとせ歴史ものがたり』は、長見義三が愛した千歳の三大集大成として街の宝であり、誇りでもあると私は考えている。

この『ちとせ歴史ものがたり』後編に収録されたエッセイ「バランス」について

て小山心平氏から有方氏に宛てた一通の手紙がある。小山氏は平成二十二年四月に急逝した。

有方氏の了解を得て、その一部を紹介させていただく。（ルビ引用者）

長見有方様

お父様の遺稿集『ちとせ歴史ものがたり』落手しました。ありがとうございます。

一気に読了しました。

僕が千歳の学校に赴任したのは昭和四十四年ですから、要員が保護者にいた関係もあってクマ基地をつぶさに見ています。読みながら当時のことを思い出しました。

「バランス」では、北方文芸掲載直後に先生に誤認箇所をお伝えしようと思つて、結局しなかった記憶も蘇ってきました。それは、訓練中零戦の墜落事故で犠牲になった方のひとり下田恵子さんのことです。

久遠村警察署長だった下田さんの父親が襲われて殉職したのは大正十五年で、その頃に恵子さんが生まれました。ですから、昭和二十年に父親の訃報で故郷に帰る予定だったというのは、誤りということですが。

なぜ下田さんについて僕が知っているか、といいますと久遠村警察署長殺害事件の犯人逮捕について冤罪事件のひとつとして調べている最中だったからです。

久遠郡大成町の高校に三年間勤めることになり、地元の人達の話をもとに後日書いた中篇が「ウタの痕跡」です。

その頃、亡き下田恵子さんの七重浜の実家には高齢の母親も存命でしたが、夫が遭遇した事件の真相を知るほどに、僕は訪ねて取材する気にはなりませんでした。

一方で、真犯人であつたらう元部下の羅卒（巡查）が左遷先の奥尻島で溺

死したり、その妻だった人が青函連絡船から身投げしたりの怪死によって、事件は闇に紛れてしまいました。（後略）

二〇一〇年十二月 小山心平

「バランス」の誤認箇所というのは、昭和二十年七月十日海軍千歳航空基地で訓練中の零戦が、市街地に墜落して四人が犠牲になった記述である。その中の一人、下田恵子さんについて次のように書かれている。

下田さんは函館高女の出身で、家は七重浜にあった。警察官であったお父さんが殉職したので、航空廠をやめて郷里に帰ることになり、この日午前中の作業だけはし、午後被服を更^かえて物資部に挨拶にきて遭難したと言われている。

誤認箇所の訂正なら、ほんの数行ですむことなのだが、残された小山氏の手紙から、言い知れぬ悲劇の一端を垣間見ることになってしまった。言い換えるなら、『ちとせ歴史ものがたり』の誤認箇所は、多くの人には知られず、時間の中に紛れてしまった関係者の悲しみの声の糸口として、そこにあるのかもしれない。

それは闇の中から聞こえてくる悲しみの声でもある。

恐らく小山氏も、関係者の悲しみを闇に葬ってしまうことはできなかったのだろう。平成十二年七月発行の『山音文学』さんおん・ぶんがく（山音文学会）96号に小説「ウタの痕跡」を発表している。作品は下田さんの父親が殺害された事件を核とした、あくまでも創作であるが事件の概要は真実であろう。

大正十五年に起きた警察署長殺害事件の諸事情を越えて、関係者の魂が少しでも慰められることを祈りたいと思った。ひいては、小山氏の供養になることを願って、「ウタの痕跡」をかいつまんで紹介させていただきたい。

なお、これについては苦小牧市在住の『山音文学』編集人・入谷寿一氏



写真2 『ちとせ歴史ものがたり』と『山音文学』

物語は一二の章で展開されていく。

小山氏の手紙から察しがつくように、師走八日、遠磯村警察署長が何者かに大怪我をさせられ、一日後息を引き取る。警察署と村役場共催の、前代未聞の葬儀が執り行われた。

年が明けて、後任の署長が着任、カニトリザワ派出所の森田巡査が離島に転勤となる。大蔵署長はこの森田巡査に日頃から辛く当たっていたらしい。転勤は左遷と噂は広がるが、村人は無関心を装うことが暗黙の申し合わせであった。

事件発生から二年後の四月、川田四郎が大蔵署長殺しの真犯人として逮捕される。

数日後、川田家の長女が出走、四郎の妻は心労から寝込んでいたが、ほどなく死亡する。川田家の長男（浩の父）は勤め先の村役場に辞表を出し、遠磯村を出て行った。

一方、離島に転勤になった森田巡査はその年の五月、気が狂って島の崖から投身自殺をしたとの噂が伝わる。さらにその翌年、森田巡査の未亡人みよが青函連絡船から身投げして行方不明になったという噂も届いた。すると当

の了解を得た。

「ウタの痕跡」は遠磯村の浜辺にたたずむ川田浩の登場からはじまる。一一年振りに故郷の海を眺めているこの浩、実は昭和の初めに起きた遠磯村警察署長・大蔵忠殺害の犯人とされた川田四郎の孫である。

初、支配的だった川田四郎冤罪説にとって代わって、川田四郎下手人説が主流になっていく。

川田四郎は投獄二七年目に恩赦で釈放されるが、その一カ月後に死亡する。

四郎の孫浩は苦渋の少年期を過ごし、写真技師となり、故郷の老写真技師の娘裕子と結婚する。裕子の父が、浩に「ウタの乾板があるはずだ」と今際（いまわ）に告げる。

それから物語は浩の「ウタ」の解明へと導かれる。

「ウタ」とはアイヌ語の「オタ」、つまり「浜」のことだった。義父の残した乾板に写っていたものは、検死のために横たわる大蔵署長の遺体、死因となった傷、浜（は）の崖（がき）の上のなで切りされたススキの跡。これらから、漁師であった祖父四郎は漁師用のマキリで刺したとされているが、それは不可能だと判明する。

立ったままで振り下ろして足元に届く刃物、「そうか、サーベルだ」と浩は思わず呟いた。

義父が今際に言い残した一言は、遠磯の村民の多くが事実を知りながら、決して口にしようとしないうる真相を暗示していた。

ここで再び「バランス」を読み返してみる。

『北方文芸（北方文芸刊行会）』昭和五十六年五月号に掲載された作品である。

内容の軸になっているのは「海軍航空隊千歳基地の訓練中の零戦が、市街に墜落して、次の四人が死亡した事故であった」という記述である。

事故当日、外で遊んでいた兄弟の兄・佐藤拓君に事故の様子を取材する目的で会っている。「バランス」を要約すると事故の様子は次のようであった。

夏の暑い日、ヒロム君は父が買ってくれた、菱餅のような平たい板を大中

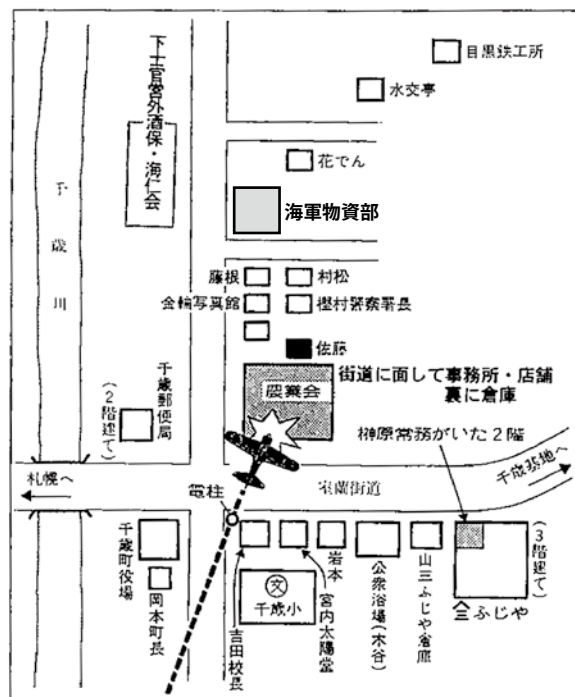


図1 零戦墜落事故現場見取図
杉村機は農業会倉庫に墜落したが、エンジンが離脱し物資部まで跳んだ。エンジンが3人を死亡させた（M）。
（藤井貞雄編『千歳特攻隊始末記』（S59）から転載・補正）

小と三枚重ねた形の軍艦を盥（たらい）にかけてあそんでいたが、どうしても右に傾くので、バランスをとるために左に何か乗せたいと思い、小石を探そうと立ち上がった。これが小学二年生。そのとき、学校のほうから突っ込んでくる飛行機が目に入る。とつさに家に駆け込んで助かることになる。

弟の茂君は、金輪をまわしてあそんでいたが、家の横から抜け出したばかりのところで仆（たお）れていた。体のどこにも傷は受けていないのに死んでいた。

これは、助かった拓君の証言である。取材した当時は四四歳になっていた。

「バランス」に最初に触れた読者はどう感じたであろうか。

長見義三は直接零戦の事故を語るでもなく、子どもの遊びの中でバランスをとるという行動に深い関心があるかのような書き出しをしている。その関心度の深さは、文中でも繰り返している。

しかし、この取材に対して、どこか気乗りしない筆運びさえ感じさせる。

なぜだろうと、思ったのは、私だけだろうか。

だが、小山氏の「ウタの痕跡」を読み終えると、「バランス」は最初とは違って見え始めるのだ。

事故に直入するのではなく、側面から事故に触れていく手法である。

長見義三は、「私はあまり気がすまなかった。実のところ、当時の事情は記録されていなかったために、あまりよく知られていなかったが」と、当時の実情を述べ、しかし、「その後、当地の道新支局の取材などで一応明らかになってきていた」とある。

死亡したのは（年齢は数え年）、

杉村 裕 海軍少尉（零戦操縦士） 二三歳

佐藤 茂 和男次男 六歳

下田 恵子 女子挺身隊員 二二歳

三川 一郎 一九歳

三川一郎さんについては特に記録がなかったようだ。下田さんとともに犠牲になったことから、男子挺身隊員だったとも考えられると記述されている。道新藤井支局長の調査で、三川さんは東京出身で北海道疎開中に動員された挺身隊員とわかった。

下田さんについての記述をもう一度引いてみると、「警察官であったお父さんが殉職したので、（略）郷里に帰ることになり（略）午後被服を更えて物資部にきて遭難したと言われている」（傍点引用者）。

気乗りのしない書き出し、事故を側面から述べていく手法、そこにいくつかの作家の暗示が見え隠れしていることに、ようやく気付かされる。

下田さんについての記述は、確かに誤認という形で残された。が、実



写真3 「ユリノキ散策会」時の小山心平氏と筆者（平成17年6月 札幌）

は長見義三はある程度知っていたと思えてならないのだ。

先に書いたように、小山氏による誤認箇所の指摘によって、読者にはそれが事件に翻弄された人々の悲しみの声へと繋がる糸口となった。

小説「ウタの痕跡」に出会わなければ、「バランス」は微かな疑問のまま通り過ぎてしまったかもしれない。

真実に触れることは、大正十五年の不幸な事件に巻き込まれた人々の悲しみをむき出しにすることになる。そして自身の内に起るアンチノミーは誰の救いにもならない。作家はあえて事件に触れなかった。

読者を信頼して書かれたエッセイ「バランス」は、プロの作家の手法による優れた文学作品であることを再認識しなければならない。

ここまで来て私はふと、小山氏も同じことを感じていたのではないかという想念に囚われた。

久遠郡大成町（旧・久遠村）での三年間、小山氏は下田さんの母親が存命であることを知っていた。事件の真相を知るほどに、訪ねて取材する気にはならなかった、と有方氏への手紙で告白している。言うなればそれは長見義三と同じ心情である。

そこで小山氏は、無実の漁師川田四郎の孫、川田浩という架空の人物にスポットを当てる方法で小説を書き上げたのだ。

「ウタの痕跡」を発表したのは平成十二年、長見義三没後六年であったことは、師への気遣いのみでなく、事件に巻き込まれた人々と共に苦しんだ年月でもあったろう。

『ちとせ歴史ものがたり』に収録された「バランス」の誤認箇所の訂正と、それを指摘し、闇に紛れてしまった悲劇を炙り出した小山氏の「ウタの痕跡」を紹介するつもりで書き始めたこの一文が、結局は長見義三が優れた作家であることを再認識することとなった。それはかえって喜ばしいことではあった。

下田さんが事故にあった海軍物資部は、東雲会館横の駐車場にあった。六六年も経ったが、犠牲になった四人の冥福を心から祈りたい。

そして、下田さんを糸口として、計らずも触れてしまった、大正十五年の不幸な事件の犠牲者、翻弄された人々の魂が安らかであるようにと願ってやまない。

参考

【長見義三】明治四十一年五月十三日長沼に生まれる。小樽中学四年終了後、道農産物検査所に勤務。昭和二年、「小樽新聞」の懸賞小説に第一席入選。その後早稲田大学教授、谷崎精二を頼って上京、入学する。在学中『文芸』に「ほっちゃれ魚族」を発表、室生犀星が激賞。第三次『早稲田文学』『新潮』に作品発表。この時期もとても期待された作家である。

代表作『姫鱒』は昭和十四年第九回芥川賞候補となる。作品は、アイヌ民族をはじめ社会の底辺に生きる人々の哀歓を、繊細な文体によって叙情的に描いている。その半生を千歳に住み、昭和五十二年文学的半生記『白猿記』を書いた。（『ワセダと現代の作家たち』早稲田大学図書館編、平成元年）

郷土史の造詣が深く、昭和二十一年ウサクマイC遺跡発見。昭和五十年千

歳を知る会、五十三年千歳文化財保護協会の設立に尽力する。

昭和五十八年発行の『増補千歳市史』編者。平成二年北海道文化賞（文学・小説（評論）受賞。五、六年に恒文社から『姫鱒』、響文社から『アイヌの学校』『別れの表情』『北の暦』の作品集四巻が相次いで復刻出版される。

平成六年四月二十一日没。

【白雲木祭】長見義三を偲ぶ会の名称。平成十年から十六年までの命日墓参、故人の愛した白雲木の花の咲く六月中旬に偲ぶ会が行われ、これらを白雲木祭と呼んでいた。二十二年に白雲木祭がきっかけとなり、市立図書館に「長見義三常設展示コーナー」が開設された。

【小山心平】本名 小山政弘

昭和二十年三月十二日札幌村字烈々布（レツレツ S30・札幌市編入↓栄町）に生まれる。北海道教育大学、酪農学園大学卒。四十四年から四十八年まで千歳中学校に勤務。この時期に長見義三と出会い、生涯長見を「先生」と慕う。五十七年から六十年まで、後に発表する小説『ウタの痕跡』の舞台である久遠郡の大成高校に勤務する。教員生活二〇年の後に作家。

著書に『夢の国日誌（風媒社S62）』などがある。

平成二十二年四月一日、六五歳で急逝。

シラツチセに残されたアイヌ文化

田 村 俊 之

千歳市教育委員会教育部文化施設課長

はじめに

古代から自然を始めとする地理的環境に恵まれていた千歳は、二万年以上前の旧石器時代から今日に至るまで、人々の生活の舞台となってきた。この千歳で営まれた人の歴史の中で九九割の時間を占めるのが、自然の一部として生きてきた旧石器時代・縄文時代・続縄文時代・擦文人時代の古人たちとアイヌの生活であった。彼らの生活の痕跡は市内各所に遺跡として残されている。

自然と一体になって暮らした最後の人々であるアイヌは、今日の遺伝学的な研究の成果により、縄文人の血を最も濃く受け継いだ民族であることが判明しており、北海道を中心に暮らしてきた先住民族であることは国際的にも認知されている。国内においては、平成二十年六月六日、国会の衆参両議院でアイヌ民族が日本の先住民族であることを認める決議案が全会一致で採択された。

ただし、弥生時代以降、北海道以外の日本列島を中心に暮らしてきた人々もまた、縄文人の血を受け継いでおり、例えば北アメリカ大陸の先住民とヨーロッパからの移住民のように、遺伝学的に両者がまったく異なる民族ということではない。日本列島の中に、はるか昔に別れ、それぞれ別な環境で独自の文化を育んできた血縁関係のある人々が存続してきたといえる。

さて、市内で行われてきた発掘調査により、数多くのアイヌ文化の遺跡が発見されている。それらは一七三九（元文4）年に噴火し堆積した樽前山の火山灰下で見つかり、近世初頭から江戸時代中期のアイヌ文化を知る大きな手がかりとなってきた。

しかし、その後のアイヌ文化の遺跡については、残念ながら確認が出来ない。なぜなら、千歳では一七三九年に積もった樽前山の火山灰の上が、現在我々が生活している地面であり、同じ地面上にある遺跡の確認は困難だからだ。このため、江戸時代中期以降の資料は、主に幕末の蝦夷地の探検家である松浦武四郎が記した日誌などの江戸末期や明治期の文献資料、幕末から昭和にかけての写真資料、民族学者による調査記録などの資料に限られる。

今回紹介するのは、山深い美笹地区に残された明治以降の近代に営まれたアイヌ文化の熊狩に伴う儀礼の場であり、人知れず行われてきた近代のアイヌの真摯な精神文化の一端を示す貴重な資料でもある。

昭和五十八年に調査を行い、翌年三月に報告書が刊行したが、すでに二八年が経過しており、今一度どんな様子だったのかを振り返り、新たな知見も交えて紹介したい。また、調査に伴って執り行われたアイヌ文化による祭事にも触れておきたい。

シラツチセ

「シラツチセ」はアイヌ語である。意味は「シラル・チセ」（岩・家）であり、「岩屋・岩陰」を意味する言葉である。岩陰は人が最も古くから利用してきた天然の住まいでもある。

このシラツチセは支笏湖周辺の河川源流域で幾つか見つかっている。実際のシラツチセとはどんなものであろうか。実は支笏湖の歴史と深い係わ

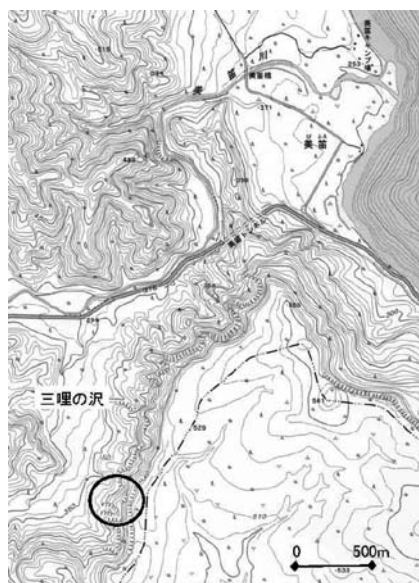


図1 シラツチセ位置図

均水深二六五^{メートル}と日本で二番目に深く、水面の標高が二四七^{メートル}なので、湖底は海面より深いところにある。このため貯水量も多く、琵琶湖の四分の三の約二一立方^{キロ}に達する。この大きな湖は、今から約四万二千年前の支笏火山が大噴火によってできた巨大な火口跡（カルデラ）である。

この大噴火は噴煙が高度一〇^{キロ}以上まで達し、火山灰は偏西風によって道北や道東、太平洋まで達し、森林を埋め木々は立ったまま炭になってしまった。炭化した林は「化石林」と呼ばれ、千歳の美々地区などで時々見つかっている。噴出した火山灰や火砕流は数十^{メートル}の厚さで谷を埋め尽くし、苫小牧市や札幌市の南側まで到達し、一部は高熱高压で固まった溶結凝灰岩になり「札幌軟石」と呼ばれている。加工しやすく耐火性が優れていることから倉庫の建築材としてたくさん利用されてきた。

支笏湖の南西部の樽前山や多峰古峰山麓、社台川上流には、この大噴火の時にできた火砕台地である標高約五〇〇^{メートル}の社台台地が広がり、緩やかに太平洋に向かっていている。

支笏湖側の台地縁は凝灰岩が露頭し、湖面からの高さが一〇〇^{メートル}ほどの

りがある。支笏湖は千歳の豊かな自然の象徴であり、湖水面積七八・四平方^{キロ}、周囲長四〇・四^{キロ}で琵琶湖の九分の一の広さ（日本で八番目）をもつ。最大

水深三六三^{メートル}、平

切り立った崖がある。この崖は湖岸の美笛船着場（川口）から三マイルの

地点にあることから「三哩^{マイル}の沢」と呼ばれる美笛川支流の右岸に沿って屏風のように連なっている。アイヌ語ではこの沢は「クッパオマピプイ」（縞状の崖・上に入る・美笛川）と呼ばれていた（図1）。

屏風を成す凝灰岩の崖は、写真1で示すようにところどころで柱状節理が貫入し、硬軟が一樣ではなく縞状にも見える。社台台地からは雨水や雪解け水などが流れ落ち、上から見るとあちこちに虫食いのように台地の縁辺が馬蹄形に侵食されている。この馬蹄形になった崖の下では、やわらかい部分が崩れ落ち、オーバーハングとなつて岩陰を作り出している。

実際に調査した馬蹄形の地形は、図2に示すように幅が約四〇^{メートル}、奥行き三〇^{メートル}ほどあり、岩陰は、馬蹄形の先端部にあり、高さ一二^{メートル}、奥行き二^{メートル}四^{メートル}、ちょうど陰に入る地面は平らで、長さ五〇^{メートル}、三日月形である。崩れ落ちた土砂がテラス状に堆積しており、正面から見るとドームに覆われた屋外ステージのようである。

この大きなシラツチセは、雨は吹き込まず、冬でも雪が積もらず、この



写真1 シラツチセ遠景

地域で狩猟する際の大切な野営地として昭和二十五年頃までは利用され続けてきたという。調査時には、野営に使用した様々な道具が

残されていた。

岩陰になっていない馬蹄形の中央部分は、一段低くなっており、二〇〇平方メートルほどの広場がある。そこには一辺が四メートル前後の落下した大岩が点在する。

この岩陰の西端に柱状節理の下端が崩れた小さな岩陰がある。高さ約二・三メートル、幅約二メートル、奥行約一・五メートルである。内部には熊の頭蓋骨などが納められており、狩猟によって捕獲された熊を神の国に送る場として利用されていたシラッチセであった。

大きなシラッチセ

大きなシラッチセでまず目に付いたのは、中央にすえられた小熊を入れるためのオリである。長さ八〇センチ、幅一〇センチ、厚さ四センチの割り板四枚を井桁に組み合わせ、根方には小熊が掘り起こさないようにするためか、人頭



図2 シラッチセ平面図・断面図



大の石を埋め込んで補強していた。

割り板は、切断に鋸を使用した痕跡がなく、斧やナタなどの刃跡があり、樹皮が付いたままであった。オリと共に長さ七七センチの木の中央をV字形にえぐったエサ入れが置かれ、オリには山を下るまで大切に飼われていた幼い小熊のものと思われる毛も残されていた。また、オリのそばからは、割れた徳利が二点見つかった。このオリがいつ頃、誰によって作られたかは不明である。

オリのほかには、薪として蓄えられた六〇本もの半裁された木や、カンジキ、まな板、木製のヘラなどの野営時に利用された自家製の道具類があったが、これらは昭和二十五年頃までこのシラッチセを利用してきた千歳在住の猟師たちが残したものである。

小さなシラッチセ

小さなシラッチセは儀礼の場である。いわば生活の空間である大きなシラッチセとは大きな柱状節理によって隔てられ、やや高いところの位置取りは神聖な空間にふさわしい。

ここでは、一三頭分のヒグマの頭蓋骨が見つかった。地表面では下顎骨がないものがあったが、発掘調査をしたところ、一〇センチ下の土中から下顎骨が多数見つかり、八頭分が上下のそろった頭蓋骨になった。

これらの骨は、当時北海道開拓記念館学芸員だった門崎允昭氏によって詳細な分析が行われ、概略は表1のようになっている。年齢や捕殺時期

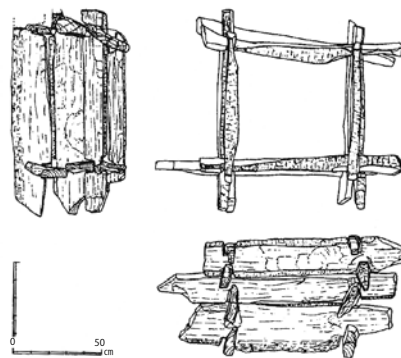


図3 小熊用オリ



写真2 送り場

については歯牙の断面に表われる年輪によって推定された。

側頭部が残る頭骨で左右いずれかに人為的な穿孔があったが、これは捕殺された熊がアイヌ文化の作法にのっとり処理されたことを確定する最も確かな証であった。アイヌ文化において熊は重要な食料源の一つであり、様々な部位を無駄なく利用した。脳も食したが取り出す際に開ける穴の位置は、雄は左側、雌は右

側と定められており、調査した頭蓋骨の性別と穴の位置は完全に一致していた。また、その中の二例では脳を取り出した後の頭蓋骨内にイナウキケ（削りかけ御幣）が入れられていた。

頭蓋骨以外には、イナウ（御幣）などの祭事に使われた木製品が多数確認されたが、いずれも腐食が進行し原形を止めているものは皆無であった。

イナウなどの木製品はシラツチセの壁に立てかけられて片付けられており、一部は土中から発見された。このことから調査された頭蓋骨や木製品は、幾度か人の手による移動があり、本来の位置を保っていないことは確実であるが、この小さなシラツチセが熊の魂を送る神聖な場であったことは確かである。

いつ・誰が

さて、いつ頃この送り場がつくられたのであろうか。子どもの頃、父親とともにここを訪れた事のある古老は、当時すでに白化した頭骨を見たと

いい、現役の送り場として

使われていた状況にはなく、父親もいつ頃のものかは知らなかったという。また、大きなシラツチセの子熊用のオリもすでにすえられていたとのことであった。これらの話から、実際に熊が送られてから一〇〇年ほどは経過している可能性がある。

では、だれが祭ったのであろうか。イオマンテと呼ばれる集落で行う飼

い熊の送り場とは異なり、狩猟によって捕殺した熊を山で送る場であり、捕殺した者が直接行う儀礼である。手がかりは、木製品の中のイナウにあった。イナウの一部にシロシと呼ばれる家代々の印が刻まれていたものと、刻まれていないものがあった。千歳アイヌはイナウにシロシを付けない習慣があることから、シロシが刻まれたものは千歳以外の集団に属するアイヌの手によるものになる。千歳以外の集団とは、地理的な条件を考慮する白老アイヌの可能性が最も高いかもしれない。

頭蓋骨の分析から見える熊猟の実景

頭蓋骨の分析によると、ここで祭られていた熊の捕殺時期は三月から六月までの間で、いわゆる春熊猟によるものである。年齢は二歳未満が五頭、十歳以上が八頭で内五頭が雌であり、三歳から九歳までの年齢層が含まれていない。

熊は、通常三歳までは母熊と一緒に行動するといわれており、二歳未満

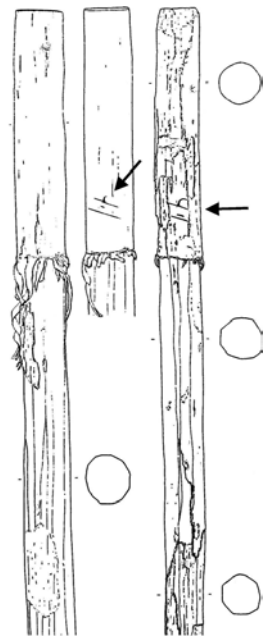


図4 シロシのあるイナウ

の五頭は母熊とともに捕獲されたと思われる。特に表の標本番号6と8は頭骨の中にイナウキケが同様に詰められていることから、同時に捕殺された親子の可能性が高い。また、他の二歳未満の四頭の小熊もそれぞれ四頭の雌熊と親子だったことは十分に考えられる。

標本番号8の鼻腔に長さ四センチの鉄片が突き刺さっていた。これは冬ごもりの穴から突き出した鼻先を上から突き刺した槍などの破片が残留したものと思われ、春の穴熊猟の様子を具体的に示す貴重な例である。

熊頭骨の慰霊祭

昭和五十八年六月二日、長い間山深く置かれてきた熊の頭骨（熊の霊・カムイ）を慰霊する祭りが千歳文化財保護協会の主催によりシラツチセの前庭で行われた。これは当時、同協会の事務局長だった故・林元一氏の尽力の賜物であった。林さんは、北海道ウタリ協会（現・アイヌ協会）千歳支部の協力のもと人や資材・道具類の準備、参加者の送迎、そして慰霊祭の記録と忙しく精力的に動いていた。

この慰霊祭には千歳在住の七〇歳を超えるエカシ（おじいさん）やフチ（おばあさん）たちも急峻な沢を上り参加する盛大な催しとなった。山の木々は新緑に輝き、まだ葉々の小さい木々の間から陽がこぼれる絶好の天候に恵まれた。エカシやフチは、無事に沢を登れたこと、天気が良くなったのはカムイ（神様）がこの慰霊祭を喜んでる証だといって微笑んだ。

祭事は、祭主としてお願いした静内町の高田勝利氏によって朗々と唱えられるアイヌ語の祈りから始まった。

神への祈りが終わると御酒が振舞われ、やがてウポポ（歌）やホリツパ（輪踊り）がにぎやかに行われた。昼食を終え、慰霊祭は神の国へ祈りを伝えてくれた火の神様に感謝するカムイノミ（神事）を行い、神にささげ

標本番号	頭蓋上顎	下顎	雌雄	年齢	側頭部穿孔	捕殺時期	備考
1	○	○	♂	22～23	左	5～6月	
2	○	○	♂	12～13	左	3～4月	
3	○	○	♂	22～24	左	5～6月	
4	○	○	♂	2	左	5月	
5	○	○	♀	12～13	右	5～6月	
6	○	○	♀	2	右	3～4月	頭蓋腔にキケ充填
7	○	○	♀	16～17	右	4～5月	
8	○	○	♀	10～11	右	3～4月	鼻腔に鉄片・頭蓋腔にキケ充填
9	○	なし	♀	14～15	右	5～6月	
10	○	なし	♀	12	右	3月	
11	なし	○	♂	2	不明	3～4月	
12	頭蓋口蓋部	なし	♂	2	不明	3～4月	
13	頭頂部片	なし	不明	1(幼獣)	不明	不明	

表1 熊頭蓋骨分析結果

たイナウに炉の火が付けられて無事終了したのである。

なお、千歳ではカムイノミの祈りの詞は、大きな声では唱えず、静かに口の中で唱えるものであるとされている。ただしアイヌ文化の理解を深め、広く知らしめるためには、はっきりと伝えることも大切であるとの考えから、現在、千歳でも一般に公開しているカムイノミの際には、声に出して唱えている。

慰霊祭のイノンノ・イタク（祈り・詞）

イノンノ・イタクとは、慰霊祭の際に高田氏によって唱えられた祈りの詞である。和訳は林元一氏によって行われた。ここでは林氏の和訳を元に、筆者が概要をとりまとめたものを紹介する。

高田氏は、シラツチセのほうに並べられた頭骨に向かって語り始めた。

「この熊の神々に対して、今までにもカムイオマンテ（神送り祭）を行ってきたようですが、長い間ここにこうして晒されていたようにも見えます。その事をみんな気にかけていました。

今日の祭りは、シサム（和人）が言い出したのですが、天上の神の国へ熊の神の霊をお送りするために、立派な祈りの詞とイナウと一緒に捧げ拝礼します。

今から神々のいる美しい天上の国へ熊神の霊をお送りする為に、昔お祭りした熊神の頭骨の前に立派な神々に来ていただき、長老達がたくさんのお礼の品として美しいイナウキケや枝幣とともに捧げ、うやうやしく拝礼します。

昔お祭りした熊神の頭骨の前に、お酒とともに美しい着物を捧げ、人々が皆うやうやしく幾度も拝礼しています」。

ここで祈りの座を炉端に移し、炉を中心に向かい合って座していた古老

達とともに火の神様に対してお酒をトゥキ（漆塗杯）からイクパシイ（酒を捧げる箸）によってささげられ、祈りの詞が再び始まった。

「国をおさめる神よ、昔、熊神の頭骨をお祭りした古老たちが豊かなコタン（村）で暮らしています。今、私たちは相談してこの山の中で神々をお招きし、昔この山で獵をした古老達と共に熊神の頭骨を拝礼しています。

神々への祈りの詞を私が皆に代わって申し上げます。人々は皆、神々の霊をお送りし、お祈りをしています。

コタンの人々は、神々のお恵みに浴し豊かに暮らしています。私たちは共にヌササン（祭壇）の神や、山を治める神様などの立派な神様にうやうやしく拝礼しています。熊神の霊を天上の神の国にお送りするために長老達とともに祈りしています。美しい千歳の村で暮らしている男達も女達も今ここで熊神の霊をお送りしています。

シベチャリコタン（静内）から参りました私も、コタンのアイヌとそれ以外の人も共に拝礼しています。水の神やヌササンの神、火の女神にも、うやうやしく拝礼しています。コタンの人もそれ以外の人も共に語り合い、熊神送りの祭りを立派に行おうと拝礼しています。

貴き火の女神様、そして水の神様、神の鳥よ、多くの神々に私の申し上げる祈りの詞をお伝えください。私達は神々に感謝して暮らしています。今、エカシやフチ達と共に神々にお礼を申し上げます。貴き神々へのお礼の品として美しいイナウとともに、トゥキからお酒を神々に捧げたいです。

神の鳥よ、私の申し上げるつたない祈りの詞を神にお伝えください。本当の獣の神である熊神の霊を、私達は神の国へお送りしています。今、私達は山を支配している熊神の霊をお送りしています。

貴き神よ、私達がそろって心から拝礼申し上げ、神々に感謝しながら暮らしている姿をご覧になってください。

私達は神々へのお札の言葉にそえて、たくさんの立派なイナウをおいしいお酒とともに、感謝をこめて捧げるものとあります」。

このような内容の祈りの詞が抑揚のある朗々とした語り口で唱えられたのである。実際には同じ詞の繰り返しや飾り詞が多く含まれ、もっと長大なものであった。

千歳におけるアイヌ文化の伝承

アイヌ文化の継承という観点から千歳を見ると、明治以降、アイヌ文化の商業化・観光化への方向がとられなかったことが、その後の千歳でのアイヌ文化伝承に少なからず影響をもたらしこととなった。

千歳は、地理的な要因から人々が行き交う土地として栄え、古代から様々な文化や物資が行き交う地域であった。このため本州からの物資は、比較的容易に入手が可能であり、それらの品々はアイヌの物質文化に深く波及浸透し、本州からの物品も自分たちが作り出す品々と同様に生活に欠くことのできないものとして定着し利用されてきた。

一方、葬儀や祝い事などの生活習慣や、信仰などの精神文化は保守的な文化であり、根強く引き継がれ伝承されてきたが、差別的な社会背景の中でアイヌ文化を積極的に外に持ち出すことはなく、家庭あるいは集団の生活の中にとどまった状態で継承されてきたのである。

この結果、千歳では家にいた女性が担う日常的な文化は外的な影響をあまり受けず、古典的なウポポやホリッパが残り、色々なユカラ（叙事詩）やウエペケレ（民話）などの口承文化が良好な状況で伝承されてきた。

一方、男性の担う文化は、狩猟やサケ漁などの様々な節目に必要なカム

イノミなどであったが、これらは本来、その状況が生じたときに個人が個別に行うものであった。今日のように〇〇祭というようにアイヌ文化への理解を進める啓発活動はなく、表立っての儀式は稀であった。狩猟やサケ漁などが非日常化し、男が担うアイヌ文化のほうが消滅しているのではないかと懸念されたが、実際には様々な伝統的な技術や作法、口承文化が伝承されてきている。

近年は、北海道アイヌ協会千歳支部やアイヌ文化伝承保存会を中心に、千歳固有の作法を復元するなど、千歳のアイヌ文化の伝承と保存への地道な取り組みが続いている。

引用・参考文献

- 長見義三『千歳地名散歩』北海道新聞社 昭和五十年
- 佐藤孝雄「熊送りの源流」『新北海道の古代』3 北海道新聞社 平成十六年
- 千歳市『新千歳市史』通史編上巻 平成二十二年
- 千歳市教育委員会『千歳市美笛における埋蔵文化財分布調査』昭和五十九年
- 千歳文化財保護協会『ちとせぶんか』6号 昭和五十八年

千歳音頭と支笏湖

守 屋 憲 治

新千歳市史編集委員会専門部員

昨年（平成二十二年）の六月、北海道新聞の千歳地方版「サブロク探検」に「千歳音頭」が大きく取り上げられた。

空港や支笏湖歌い60年前制作

千歳音頭復権の兆し 市 町内会などと連携、普及へ

【千歳】空港、支笏湖、樽前山など千歳の情緒を歌った千歳音頭が、復権の兆しを見せている。60年前に制作され、地域の祭りなどで盛んに踊られてきた歌の認知度は、時代の変化とともに年々低くなっているが、「貴重な郷土芸能を次世代に残そう」と、市などが新たな普及策を模索している（リード部）。

多くの市民が、歌は知っていても踊り方はわからないという千歳音頭。

記事では、『千歳の特徴が上手に織り込まれた魅力ある歌』というのが、千歳音頭に対する関係者の一致した評価。千歳市民の心をつなぐ郷土芸能に帰り咲くことが期待される」と結んでいる。

六〇年前ということは昭和二十五年に制作されたことになる。この年は札幌で初めての雪まつりが、苦小牧・王子製紙のリンクでは第五回国民体育大会冬季スケート競技会が開催された。千歳にあつては町立の千歳高等学校（S23道野幌高校千歳分校季節節定時制↓S25豊平町立月寒高校千歳分校）が開校した。朝鮮では動乱が勃発、政治的には共産主義への脅威から連合国軍最高司令官司令部（GHQ）の勧告によって共産党員等の公職追放Ⅱレッドパージが行われた年でもあり、日本は未だ占領下にあつた。

筆者は昭和五十年に遊学先から千歳に転入した。以来千歳に住んではいるが、多くの市民と同様に千歳音頭の歌詞は知っていても踊りを見たこともなく当然踊り方も知らない。歌詞と残された写真を手がかりに、これまで論じられることのなかった千歳音頭の来歴と謎について考察したい。

千歳音頭

千歳音頭の千歳における刊行物の初出は、昭和二十六年七月一日に創刊された二ページ立て千歳町弘（広）報『ちとせ』の一ページ中央に支笏湖の写真とともに歌詞が掲載された時である。『町勢要覧』にあつては同じ年の八月十五日発行の二十六年版からである。いずれにも作詞者、作曲者名は記されていない。三十四年版『要覧千歳』から「作詞 北郷雪夫、作曲 東辰三」の名が見え（S33市制施行）、五十一年版『要覧ちとせ』には「昭和二十五年9月制定」と記載されていた（平成三年版から千歳音頭削除）。

千歳音頭に関して昭和二十五年当時の資料として写真三葉とクラフトジャケットに納まった「苦小牧シャンソン」とのカップリングレコード一枚の四点が市史資料として保存されている。当時のジャケットは盤面中央のレーベルが見られるように中心部を丸くくり抜いたもので固有のデザインではなかった。

写真の裏書には万年筆で次の記述がある（ルビ引用者）。

「千歳音頭 苦小牧歌謡 発表会 踊るは苦小牧の^{ねえ}姉さん達」（表紙写真（大））

「苦小牧の姉さんによる千歳音頭の発表会」（写真1）

「千歳音頭 発表会」（写真2）

全葉に「25. 9. 23. 於支笏湖畔¹ 道新寄贈」と記してあり、発表会が秋分の日（旧・秋季皇霊祭）の昭和二十五年九月二十三日（土曜）に支笏



写真1 苦小牧の芸妓による千歳音頭の披露

湖畔において苦小牧歌謡発表会として行われ、北海道新聞の記者が撮影したことがわかる。

表紙写真(大)、写真1を見ると、恵庭岳を望むボー

ト乗り場附近(旧・バス停留場)に「苦小牧歌謡発表会千歳音頭」の吊看板を掲げた特設舞台で踊りを披露する苦小牧花柳界の芸妓が写っている。写真2で踊りを披露しているセーラー服とジャンパースカートの女子生徒は、苦小牧市博物館に調査を依頼したところ制服から苦小牧東中、弥生中などの中学生だということがわかった。

ただ、写真を見て、なぜ苦小牧歌謡発表会が支笏湖畔で行われ、どうして苦小牧の女子中学生と芸妓が千歳音頭を踊っているのかは謎だった。

レコードは割れているため試聴することができない。昭和二十五年の発売であるため、レコードはSP10インチ盤78回転・モノフォニック録音である。レコード会社は日本ビクターで、千歳音頭(品番PR1068・PE1142)と苦小牧シャンソン(PR1068・PE1141)がカッティングされている。品番から千歳音頭がB面ということがわかる。B面中央のレーベルには品番のほか、「千歳観光協会選定 懸賞募集当選歌」「北郷雪夫作詞 東辰三作曲/東辰三補作詞 小沢直与志編曲」「市丸鈴木正夫/日本ビクター合唱団」「著作権者 日本ビクター株式会社 横浜」と記されている。当該レコードは自費制作であり経費の記録も残っていないが、



写真2 千歳音頭を披露する苦小牧東中などの女子生徒
舞台の上にビクターのペナントと提灯が揺れる
(写真1、2 昭和25年9月23日 支笏湖畔
北海新聞社撮影)

昭和二十五年当時SP盤の販売価格は一枚一七〇円程度だった。

千歳市街で千歳音頭が初めて披露されたのは、(旧)日本航空の札幌千歳線試験機マーチン2・0・2・N93043「もく星」が飛来した昭和二十六年十月二十三日の民間航空千歳空港開設祝賀会と思われる。なお、開設祝賀会は苦小牧市と札幌市の後援を得て

実施された。『志古津』第13号に拙筆「民間航空・千歳空港開設」において次のように記述した。

特設舞台では余興として苦小牧観光協会による「千歳音頭」と「苦小牧シャンソン」の唄と踊りが、一五名の苦小牧花柳界の芸妓によって披露された。前年に選定され「銀のネ 銀の翼が世界をつなぐ・・・」と空港を歌い込んだ千歳音頭の歌詞が具現化した日となった。

苦小牧民報2005(平成17)年5月7日付「町からまちへ」に千歳音頭に関して次の記事が掲載された。

SP盤レコードなぜ? 「苦小牧シャンソン」と「千歳音頭」

2ご当地ソングが一枚に 新冠町レ・コード館も「珍しい」

新冠町レ・コード館で一枚のSP盤レコードが見つかった。「苦小牧シャ

ンソン」と「千歳音頭」がカップリングされている。(略) なぜ苦小牧市と千歳市の歌が一枚のレコードになったのかは分からない。(略)

同館では、道内の「ご当地ソング」を展示している。六十七万枚を超える所蔵のレコードを調査していた職員が見つけた。(略)

苦小牧市立中央図書館に、「苦小牧シャンソン」のレコードは保存されているが、「苦小牧音頭」とのカップリングで、「千歳音頭」のレコードはありません。千歳市には一枚保存されている。でも「割れているので聴くことはできません」と言う。(略)

ほぼ同時期に観光振興を目的に製作された二曲で、「なぜ二曲が一枚のレコードになったかは分からない」という。同館では、このレコードを蓄音機で聴くことができる。(後略)

千歳音頭はこれまでに発行された『千歳市史(S44)』『増補千歳市史(S58)』のいずれにも全く触れられていない。これは前述の四点の資料のみでは著述のしようもなかったことが主因と思われる。

まず、支笏湖が国立公園に指定されたことに伴う観光協会の設立、支笏湖と苦小牧の関係などから論じていきたい。

註(1) 「湖畔」という地名(町名)は昭和二十六年五月一日に、現在の「支笏湖温泉」は六十一年四月二十日に施行された。

支笏湖の自然保護と観光宣伝

明治四十一年に山線と呼ばれた王子製紙苦小牧工場専用鉄道が苦小牧・支笏湖畔間に開通した。専用鉄道であったため王子製紙従業員とその関係者以外の便乗は許されていなかったが、大正十一年四月から一般の乗車が許可された。支笏湖の大自然が少しづつ知られ人々を魅了するようになり、姫鱒(チップ)釣りも一部の愛好家のものではなくなりつつあった。

宿泊施設としては四年に(新)丸駒温泉旅館が開業、釣り人や恵庭岳登山旅行者の便に供した。

大正十一年から昭和五年まで王子製紙が漁業権を有したヒメマスの保護と育成を目的とした支笏湖保勝会という組織があり、会長には支笏湖の谷本亀が就任、理事は王子製紙苦小牧工場、帝室林野局札幌出張所などの役職であった。保勝会は漁獲がなくなり一時期休止状態にあったが、昭和七年に二代目村長山田旦を会長に活動が再生、副会長には初代会長であり、村会議員でもあった谷本亀が就任した。

昭和十一年に道央で第三四回陸軍特別大演習が実施され、秩父宮雍仁親王、あさかのみややすひこ朝香宮鳩彦王のほか多くの高官が苦小牧經由で支笏湖を訪れた(翌年、根志越橋左岸に「野外統監部御跡」碑を建立、市内に現存する)。

支笏湖保勝会は、昭和十三年から支笏湖姫鱒保護協力会へと発展、支笏湖の保全と宣伝に努めたが、訪れる観光客は少なく昭和九年当時で年間一万人程度であったという。

戦前から道央地区の支笏湖を含む名勝地を国立公園にする運動があったが成就することはなかった。敗戦の翌年、昭和二十一年五月、定山溪観光協会会長であった豊平町長小須田治朗が定山溪、登別、支笏湖、洞爺湖周辺の市町村と国鉄札幌鉄道管理局、日本交通公社、札幌観光協会などを定山溪の章月旅館(現・章月グランドホテル)に集め道南国立公園指定促進期成会を立ち上げた。設立総会の席上、期成会の名称「道南」を「北海道」とし七月に北海道選出代議士を紹介議員とし衆議院に請願し十月に採択となった。

この当時、ウサクマイ烏桺舞の支笏湖地区を苦小牧の行政区域に編入する運動が再燃したが、『千歳市史』には「どうしてこの期になって、苦小牧からこのような請願が出されたか不明であるが、不思議ですらある。もしかする

と国立公園の声が高くなったことが、原因しているかと思われるほどである」と編著者であった詩人の更科源蔵は述べている。

昭和二十三年十二月に「支笏洞爺」は国立公園に内定、翌年二月には厚生省の最終現地調査があり、五月十六日に厚生省告示第八四号として国立公園に指定された（指定運動については『千歳市史』『新千歳市史通史編上巻（H22）』を参照されたい）。

当時の支笏湖がどのように紹介されていたのか、昭和二十三年版『千歳町要覧』に見てみよう（数値は全てママ。ルビ、文字補正は引用者）。

（支笏湖）樽前岳―恵庭岳の間に眠る神秘の湖がそれである。周囲32・5KM、深度410M（1350尺）海抜275M（850尺）の高標に水を湛える噴火湖であつて海面より高いこと152M（500尺）その水色深碧清澄^マ4（四）時連峰の色に映じ、幽邃^{ゆうすい}正に神秘の境である。

湖には支笏湖孵化場放流のヒメ鱒、鮎、アメ鱒を産し毎年6月1日から好人釣遊が盛んであるしボートを浮かべるもよく湖上周遊も佳である。

支笏湖はエメラルドグリーンで透明度が高く、四季を通じて美しい神秘的の湖であり、釣魚とともに湖上周遊に良いというばかりである（現公表値・周囲 \parallel 約四〇^キ、水深（深度）三六〇^尺、海抜二四八^尺）。

観光ホテルと観光協会の設立

支笏湖畔には皇族の宿泊施設である王子製紙の倶楽部支笏湖別邸（通称・支笏湖倶楽部）と旅館翠明閣（現・レイクサイドVILLA翠明閣、平成二十年から丸駒温泉旅館経営）があつたが、昭和二十二年から米軍に接収され将校用厚生施設「サービスセンター」となった。このため旅行者が支笏湖畔で宿泊できる施設がなくなり、臨時の小規模なものを建設した¹が収容人数も少なく利便も悪かつた。

昭和二十三年四月一日苦小牧は人口三万三千人で市制を施行、九月には商工会議所が設立された。その直後に経済界から支笏湖畔にホテル建設の機運が高まり、千歳の経済界にも呼びかけがあつた。発起人は、苦小牧から菱中興業（旧・中村組／S23商号改称）の大沢辰雄、駅前・渡辺待合の渡辺広継、駅前通×王子正門通・旅館富士館の先田秀吉、一条通・中嶋呉服店の中嶋誠次ら有志八名、千歳からは伊藤木材の伊藤弘、山三渡部商店の渡部栄蔵、千歳郵便局長中川秀男を始めとする二人だった。資本金は三百万円で苦小牧、千歳ともに百五十万円を負担した。苦小牧経済界のホテル建設構想は、支笏湖の国立公園指定を見越したものだつた。この当時、将来の空港を夢見る千歳の人口は一万五千人に過ぎず経済界の規模も小さかつた。出資者数も苦小牧の八人に対して千歳は二人を数えた。

昭和二十四年三月二十四日、千歳町において支笏湖観光株式会社¹の設立総会が開催された。社長には王子製紙苦小牧工場（S24・8王子製紙（財閥解体）↓苦小牧製紙・十條製紙・本州製紙、苦小牧製紙↓S27王子製紙工業↓S35王子製紙、H8本州製紙合併）の庶務課長大木祐三が選出され、常務には千歳の伊藤弘（S29・8社長就任）、渡部栄蔵、中川秀男らが、苦小牧からも同人数が常務に選ばれた。本社は千歳町川北（現・錦町）の伊藤木材内に、支社を苦小牧市表町に置いた。主な事業として、観光ホテルの経営、温泉利用事業、水産養殖事業とこれに付帯する一切の事業とされた。

すぐに支笏湖観光ホテル¹の建設が始まつた。五月に着工し、八月一日に開業した。本館は約四〇〇平方^メ（二二〇坪五合）の規模だつた。客室数、収容人数については詳らかではないが、一五室・五〇名程度と思われる。宿泊料は一泊八〇〇円、部屋使用料は五〇円で軽飲食を提供する談話室¹パーラーも併設されていた。



写真3 支笏湖観光ホテル玄関
昭和33年には100畳敷き大宴会場、3階建て客室が増築された
(昭和30年代中期 支笏湖観光ホテルパンフレットから転載)

ホテルの建設は苦小牧と千歳両経済界の協調によるもので、まさに千歳音頭誕生の序章でもあった。

支笏湖観光ホテルが着工する前月の二十七日、札幌市中央公民館で関係者が集まり支笏湖開発座談会が開かれ、支笏湖畔にホテルの建設、遊覧船の建造などが話し合われていた。ホテルの建設は的を射たものだった。

昭和二十四年五月十六日に支笏湖が国立公園に指定された。指定に先立つ十日には千歳に観光協会が設立され（S45改組→観光連盟）、会長には町長の山崎友吉、副会長には町議会議長で支笏湖観光常務の渡部栄蔵が選ばれ、事務局は町役場産業課商工係内に置いた。

九月十日にはB6判四七^六（本文三六^六）に及ぶ初の観光小冊子（パンフレット）『観光の千歳・国立公園の支笏湖』が発行され、本文巻末に町の代表監査委員川合新三郎（T15・千歳着陸場造成時村長）が作詞した北海音頭の替え歌である「千歳音頭」の歌詞が掲載された。

十二月十日には苦小牧にも観光協会が設立された。会長には日本通運苦小牧支店長の西浜小三郎、副会長には先田秀吉という陣容だった。

このように千歳と苦小牧は支笏湖を介して協調関係にあり、市制を敷いた苦小牧は民間主導、人口規模が小さかった千歳は行政主導という違いはあったにせよ国立公園支笏湖を背景に観光協会もほぼ同時期に設立された。

この当時、支笏湖畔には支笏湖姫鱒保護協力会を発展させた支笏湖観光協会があった。会長職には支笏湖保勝会長であった谷本亀^{（三）}が就いていた。千歳観光協会は支笏湖観光協会が発展したとされているが昭和二十五年当時は両協会が並立し、支笏湖観光協会は観光宣伝に比し支笏湖の保全に主眼を置いていたと思われる。なお、谷本亀は千歳観光協会の理事にも就いていた。

註（一）支笏湖観光ホテル（客室数六二、収容人員四〇〇）は平成二十年四月二十六日から鶴雅観光開発が運営した。十一月三日から全面改装のため休業。翌年五月十五日に新たに滞在型リゾートホテル「しこつ湖鶴雅リゾートスパ水の調^{うた}」（客室数五三、収容人員一九九）としてオープンした。

註（二）千歳観光連盟は平成十六年五月に開催された創立五五周年記念交流会の席上、パワーポイントで北郷版千歳音頭発表会の写真に川合版千歳音頭の歌詞を重ねて紹介した。「一九四九年（昭和24年）観光資料『観光の千歳』発行 千歳・支笏湖の観光宣伝として『千歳音頭』製作（引用一部略） ハア〜ミドリシタタルミヤノモリ〜ノ／コケノハナサクギョウザイショ〜ノ／ハア〜ヨイノスズミハ千歳カワ〜ノ／ヨイヤコラサ〜 ヤンサノエ〜ノ／ハア 飛行機ニギオウ 千歳マチ〜ノ」なお、ギョウザイショ〓行在所は誤読で正しくは「あんざいしよ（行幸時の仮住まい）千歳においては明治天皇行幸時の新保旅館を指す」と読む（川合版歌詞はひらがな漢字交じり）。二番以降に今はなき長都沼、剣淵温泉^{（ウツミ）}などが歌い込まれている。

註（三）丸駒温泉旅館発行『原始の森と湖に…』第3章・座談会に「多分、そ

の辺の観光関係を取りまとめていたのが千歳観光協会だったのでしようが、これははじめは支笏湖観光協会といていましたね」との記述がある。

支笏湖と苦小牧

昭和二十年代中期に千歳と苦小牧が国立公園支笏湖を介して協調関係にあったことは先述したが、苦小牧は王子製紙が操業を始めた明治期から支笏湖と密接な関係を持っていた。

支笏湖は全域が千歳町の行政区内にあったが、支笏湖への最も有力な交通手段は王子製紙が千歳川水力発電所建設のため敷設した山線だった。

王子製紙苦小牧工場裏手の山線苦小牧駅から二時間ほどで支笏湖畔に着いた。また、支笏湖地区を含む孵化場以西の烏柵舞の治安も明治の終わりが王子製紙の費用負担による請願巡査が第一発電所附近に支笏湖巡査駐在所として置かれ、千歳の烏柵舞村西方は苦小牧警察署の管轄であった(昭和十四年、千歳鉦山にも苦小牧警察署請願巡査が草笛に配置された)。さらに、水明郷にあった烏柵舞特別教授所の教育体制に不満を感じた同社は、大正六年から私立王子尋常小学校、十二年からは尋常高等小学校を経営した(S6移管・千歳村烏柵舞尋常高等小学校)。このようなことから大正八年には烏柵舞地区を苦小牧の行政区域とするよう「行政区画変更ノ義ニ付請願」が北海道庁長官に提出される騒動があった(昭和二十年にも行政区画問題が再燃^{さいせん})。

苦小牧では皇族・高官の来苦^{らいせん}があった場合、支笏湖観光を計画するのが常であった。そのため、皇族が宿泊する総檜造りの豪華な支笏湖倶楽部は貴賓館の役目をもって大正五年に建てられ、山線には貴賓車も用意された。別邸建設の発端は七年に閑院宮載仁親王^{かんいんのあやとむしのう}の来道が予定され、その宿舍として建設したものであった。別邸完成の二年後、七年八月二十五日に閑

院宮同妃若宮が御宿泊されている。

別邸は大正十一年七月に皇太子(後の昭和天皇)が天皇の摂政として支笏湖に行啓した際に休憩所として利用されたほか、七年の閑院宮から昭和二十年八月の清宮貴子内親王^{すがのみやたかこ}内親王(後の島津貴子)まで戦前戦中において一九回の御宿泊があった(昭和天皇と香淳皇后の御宿泊は昭和三十六年と四十三年/別邸は昭和三十五年に現在の商店街南西にあったものが現在地(温泉街北端)に移築され、四十三年には昭和天皇をお迎えするため新館が建築された)。

翠明閣は支笏湖と千歳川上流部の水利権者である王子製紙が、大正初期に苦小牧工場山林部関係者の宿泊施設として建設、昭和十一年から請負業者中村組が王子関係者と一般旅行者の用に供するため受託経営していた。支笏湖の国立公園化にいち早く反応したのが苦小牧だった。

山線が廃止となる一年前の昭和二十五年八月二十四日、苦小牧市営バス(市営バス)が開業した日に山線と並行する形で支笏湖産業道路(現・国道276号)が米軍払い下げの重機によって竣工、翌日から市営バスが一日四往復(含・不定期一往復)運行した。支笏湖線は苦小牧駅前・支笏湖畔の所要時間は四十五分だった。市営バスは開業当初三両(後に五両)のボンネット車両があったが、支笏湖線には唯一のロマンスカーが割り当てられた。観光が産業として発展する幕開けの時で、この路線は多くの苦小牧市民が観光と保養に貸切利用するところとなり市営バスのドル箱路線となった。

市営バス支笏湖線は冬期運休したが産業道路は支笏湖観光の動脈と位置づけられた。昭和二十八年八月からはモラップ(＝モーラップ、本論では「モラップ」に統一)線を運行、モラップキャンプ場に船でなければ行けなかったキャンパーを支笏湖畔からバスで運んだ(三十四年からは樽前登

このように王子製紙が苦小牧で創業以来、支笏湖畔は苦小牧の奥座敷としての色彩が濃く、苦小牧の人々も支笏湖を行政域の延長として捉えていた。また、支笏湖地区に住む人々も日々の買い物、子弟の高校進学などには苦小牧に重きを置き、苦小牧駅前には日帰りができない千歳鉢山関係者の宿泊施設もあった。

支笏湖周辺の千歳域内における苫小牧市の観光施設等は次のとおり（供用順）。

- ・苦小牧市営バス路線（昭和二十五年開設／平成五年譲渡）
- ・苦小牧市営モラップ休憩所「樽前荘」（昭和二十七年開設）
- ・国有林野内モラップキャンプ場（昭和二十四年北海道開設、三十三年
・千歳市（苦小牧市共同運営）／平成九年環境省所管休暇村支笏湖運
営）苦小牧市の関与については不詳
- ・苦小牧市道樽前山登山観光道路（昭和三十二年開設／道道141号
（樽前錦岡線）・ヒュッテ）
- ・苦小牧市営樽前山七合目ヒュッテ（昭和三十四年開設）
- ・苦小牧市樽前山七合目駐車場（昭和三十四年開設）
- ・国設モラップ山スキー場（昭和三十八年開設／平成三年休止・十七年
廃止／千歳市、苦小牧市共同運営）
- ・支笏湖バスターミナル（苦小牧市、北海道中央バス共同出資／昭和四
十年供用／平成十二年廃止）

宣伝用レコードの作製

苦小牧観光協会が発行した『30年のあゆみとまこまい観光の年輪』に

道南産業観光社代表の長桶鎌吉が記した「協会の生いたちと港まつり」にレコード制作に関する記述があり、千歳音頭の端緒がわかる。

(略) 昭和24年5月9日待望の支笏湖、定山溪、洞爺湖を含む「支笏洞爺国立公園」が指定されている。(略) (昭和25年) いよいよ観光事業に一步を染めると第二弾として取り上げたのは観光宣伝用としてのレコードの作製であつた。(略) 先ず苫小牧側から当時支笏湖観光協会長(千歳には千歳市と支笏湖に観光協会があつた)、千歳市観光協会長中川氏(当時郵便局長)の両氏に相談の結果、待つてましたとばかりの大賛同により、早速歌詞の公募とともにレコード会社と交渉を進め、キングレコードで吹き込み、第1回の観光まつりの前夜祭にこれを披露発表し、市民に愛誦された。

歌詞の募集について『南北海』⁽¹⁾によると、昭和二十五年七月初旬に苦小

苦小牧歌謡
支笏湖音頭
歌詞を募集

に改定され、編輯するものに
つてゐる。發行人九月十四日
の附けられる序文に「豊後縣
やむに振興の機運である、野
邊實政は公のお力
ヲ以て切」七月三十一日又
刊行先「若小牧市本町若小牧郵
光臨館宛書」若小牧歌謡會
選作（市振費一萬円）支那湖智
頭（町振費一萬円）および光
臨館宛書（俳作家その他）許
知若小牧千歳の間歌光臨
に因ふことあり

写真4 支笏湖音頭の歌詞募集記事
千歳音頭は当初、支笏湖音頭として歌詞を募集した
(昭和25年7月9日付 『南北海』2面)

ると、昭和二十五年七月初旬に苦小牧、千歳両観光協会は歌詞の募集を始めたことがわかる。当初、募集曲名は苦小牧歌謡、支笏湖音頭としていた。後援として苦小牧市、千歳町、南北海新聞社が名を連ねた。当選作はレコードに吹き込み、苦小牧市長賞、千歳町長賞として賞金一万円が授与されるというものであった。賞金は大卒公務員の初任給二カ月分に相当する高額なものであった。応募作品の締め切りは七月三十一日で、送付先は苦小牧観光協会とされた。

七月末までに苦小牧歌謡が一二八

篇、支笏湖音頭が一〇一篇の応募があり両観光協会で一次審査を行い、数篇を横浜・守屋町の日本ビクターに送付したのが八月四日のことだった。

この時点で千歳観光協会の募集した曲名が「支笏湖音頭」から「千歳音頭」に変わった。

八月二十七日付『南北海』二面に歌詞が決った経過が掲載されている。

苦小牧シャンソン千歳音頭 歌詞決る

支笏洞爺国立公園指定を記念し苦小牧、千歳両観光協会で一般から公募した苦小牧歌謡と千歳音頭は既報の通り両協会代表作数篇をビクターレコード会社に送ったがこのほど両歌詞とも稚内市北郷雪夫氏の歌詞を補作して決定をみた苦小牧歌謡は苦小牧シャンソンとして吉川静雄氏が補作、歌手は宇都宮清、生田恵子の両氏、千歳音頭は東辰三氏補作、歌手は市丸、鈴木正夫の両氏でレコードは九月四日ごろ二千枚が到着二十二日から行われる観光祭りには二十一日の前夜祭に市役所前で盛大な発表会を行うことになっている、なお北郷雪夫氏は室蘭音頭の作詞家である

苦小牧シャンソン 北郷雪夫作詞／吉川静雄補作／吉田正作

①ぱらり開いた扇力浦に 並ぶマストを波が呼ぶ

出船人船かもめも唄う 海のふるさと苦小牧苦小牧

新冠町のレ・コード館で見つけた苦小牧と千歳の歌が一枚のレコードになった理由は、国立公園所在地として観光宣伝用レコードを苦小牧観光協会が発案、千歳観光協会と共同して制作したものとわかった。

「苦小牧歌謡」という曲名で歌詞を募集するのも理解に苦しむものがあるが、「シャンソン」とは仏語で「歌謡」の意である。昭和二十五年九月に支笏湖畔で撮影された写真にある特設舞台の看板「苦小牧歌謡発表会千歳音頭」の苦小牧歌謡とは苦小牧シャンソンと読むことがわかった。

レコードは、苦小牧では一条通り伊藤ラジオ店と三条通りの齋藤時計店

で、千歳では室蘭街道沿い錦町二丁目（八天庵南二軒隣）の博信堂で発売された。

『南北海』の記事には千歳音頭の歌詞が掲載されていないので紹介したい。

千歳音頭 北郷雪夫作詞／東辰三補作詞／東辰三作曲／小沢直与志編曲

①銀のネ 銀の翼が世界をつなぐ ヨイヨイ（繰り返し）

空の港も ひらけて晴れて

今日もあちらの 今日もあちらの

ホイホイホイ（繰り返し） お客様

ソレ チトセヨイトコ

アリヤリヤン リヤン

シコツ ヨイヨイ ヨーイヤナ（繰り返し）

②招くネ 招く支笏湖 樽前山は 燃えてひとすじ 千歳の契

情海より 情海より まだ深い

③木影ネ 木影すずしいモラップあたりファイヤかこんだ キャンプの村で

若い血潮も 若い血潮も 又燃える

④ダムネ ダムのしぶきにしつぽり濡れて 届く思いに 散らした紅葉

胸に灯ともす 胸に灯ともす 発電所

⑤美笛ネ 美笛鉦山に黄金が湧いて 月の丸駒 湯もやの中で

好いた同志の 好いた同志の 桜色

⑥孵化場ネ 孵化場娘の気だてに育て お洒落姫ます 湖くらし

誰が釣るやら 誰が釣るやら 恋の味

作詞の北郷雪夫は稚内在住と記事にあるが、「北郷雪夫」とは北の郷＝稚内と雪をもじったペンネームで本名は福田清、職業は新聞記者で読売新聞社札幌支局稚内通信部に勤めていた（福田清の詳細、調査するも不

明)。

作曲・補作詞の東辰三(M33～S25)は、戦時歌謡「荒鷲の歌」(S15)見たか銀翼この勇姿・・・」や平野愛子が歌う戦後の大ヒット曲「港が見える丘」(S22)あなたと二人で来た丘は 港が見える丘・・・」を作曲・作曲した昭和前期のヒットメーカーとして知られる。千歳音頭を作曲したほぼ一ヵ月後の九月二十七日に五〇歳の若さで病死した。千歳音頭は東の遺作ともいふべき最晩年の作品となった(赤い鳥「翼をください」、由紀さおり「夜明けのスクエイト」、キャンディーズ「あなたに夢中」で知られる作詞家山上路夫は東の子息)。

歌はうぐいす芸者としてヒット曲を連発した市丸(M39～H9)と初期のNHK紅白歌合戦に五回出場した民謡歌手鈴木正夫(M33～S36)で、当時のスーパースターによるデュエットとなった。

なお、千歳観光協会は北郷に対して千歳町長賞として一万円を贈ったが、選定曲の歌詞について千歳観光協会に帰属することを明示しなかったことから著作権は北郷が有した。著作権の概念が乏しかった当時としてはやむを得ないことだった。また、千歳音頭は『要覧ちとせ』に「昭和二十五年九月制定」と記載されていたが、八月二十七日付『南北海』の記事から歌詞が決まったのは八月だということがわかる。九月は支笏湖畔における発表会開催月で資料として残されている写真の裏書を引用した誤りだった。レーベルを参考に「千歳観光協会選定」とすべきであった。

千歳観光協会は昭和二十四年に川合新三郎作詞の千歳音頭、二十五年には北郷雪夫が作詞した千歳音頭、ということと二年続けて同名の音頭を世に出したことになる。

川合版千歳音頭は観光パンフレット発行にあたって役場(観光協会)内において急遽作られた替え歌であり、当然レコード化も成されていない。

「支笏湖音頭(＝千歳音頭)」の歌詞公募に当たって観光協会として川合版には重きを置くことはなかった。川合版は歌われることもなく、僅か一年足らずで北郷版に千歳初のご当地ソングの座を譲ったということになる。

註(1) 南北海新聞社による昭和二十五年一月十五日創刊の日刊紙で、二十六年九月一日から『苦小牧民報』(二十七年一月一日・商号「苦小牧民報社」)に改題した。三十八年七月二十日から『千歳民報』を発行する。

註(2) 「ハア 伸びる室蘭 伸びる室蘭 世界の波止場 出船入船ソレ宝船・・・」で始まる室蘭音頭は昭和二十五年に室蘭商工会議所が公募によって作った曲で、「暁に祈る」「イヨマンテの夜」の伊藤久雄と「トンコ節」の久保幸江が歌った。

註(3) 蘭越の北海道水産ふ化場千歳支場(現・水産総合研究センター千歳さけます事業所)をさすものではなく支笏湖孵化場(現・千歳市支笏湖ヒメマスふ化場)を歌っている。

千歳音頭の歌詞

ここまで千歳音頭ができた背景を記述してきた。

ここでは、歌詞に関する疑問を考察してみたい。

一番の歌詞「銀のネ 銀の翼が世界をつなぐ 空の港も ひらけて晴れて・・・」と空港・民間航空を連想する歌詞と前述の支笏湖畔における写真の日付(昭和二十五年九月二十三日)に違和感を覚える。なぜなら、千歳音頭の歌詞を募集した二十五年七月はGHQからの航空禁止令(二十一年十一月二十八日発出SCAPIN(連合国軍最高司令官覚書)301「民間航空活動の全面禁止に関する指令」が発令中だった。歌詞募集直前の六月二十六日に、その年の一月一日において日本上空を飛行することが認め

られていた外国航空会社七社が共同で運行する一社に限って国内航空輸送を許可するといったSCAPIN2106（日本国内航空輸送事業運営に関する覚書）を日本政府に通達したばかりだった。

SCAPIN2106を受け日本国内航空（JDAC）が設立されるのは昭和二十五年末のことで、札幌丘珠との熾烈な空港誘致合戦の結果、千歳飛行場が北海道空港に指定されたのは早くとも昭和二十六年の五月頃と思われるからである（『志古津』第13号「民間航空・千歳空港開設」を参照されたい）。国内航空の展望が未だ開けず、千歳飛行場にJDACが就航する確証がなかった二十五年七月に「銀のネ 銀の翼が世界をつなぐ・・・」の歌詞がどのようにして思い浮かんだのだろうか。

次に、二番以降の歌詞に支笏湖周辺の見所が列挙され、その歌詞は五番に代表される「月の丸駒 湯もやの中で 好いた同志の 桜色」などと、俗っぽい歌詞が並び一番の歌詞との違和感があるのはなぜなのだろうか。

この二つの疑問について筆者の推論を述べたい。

当初、千歳観光協会は歌詞の募集に当たって支笏湖音頭の曲名で作品を募集した。しかし、観光協会は歌詞が支笏湖周辺の見所ばかりに限定したのでは市街地における音頭の普及・広がり期待が持てないという不安を感じた。このため募集終了後に曲名を千歳音頭に変更、日本ビクターに飛行場に夢を託した歌詞を新たに付け加えることを依頼したのではないかと考えた。このことがレーベルにある「東辰三補作詞」の意味か。この場合、二番以降が北郷雪夫によるオリジナルの歌詞となる。

だが、先述の観光パンフレット『観光の千歳・国立公園の支笏湖』中、千歳町のほこり・（四）交通―「特に飛行機について」に「この点で千歳町は、アメリカのノースウエスト会社国際航空港として確認されている」とある。これはSCAPIN2106が通達される以前、ノースウエスト

航空（NWA）の大圏航路・ニューヨーク・アラスカ經由東京・マニラ線が航続距離の関係から千歳におけるテクニカルランディング（給油寄港／乗降なし）の計画があったのだろうか。北郷雪夫の職業が新聞記者であり、NWAの件を聞き及び飛行場の将来性を歌詞に託したことも否定できないが、そうだとすると二番以降の歌詞の違和感が整理できなくなる。いずれにしても、苦小牧観光協会、千歳観光連盟ともに一次審査を通過し日本ビクターに送付した歌詞控は保存がなく、今となっては確かめようもない。

苦小牧観光まつりと苦小牧歌謡発表会

昭和二十五年七月三十一日から苦小牧地方に降り出した雨は、翌日まで総雨量四四七・九ミリに達した。死者一人、負傷者一人の人的被害のほか、家屋被害は流出一五戸、床上浸水一五三〇戸、床下浸水四〇七五戸に達した。敗戦から五年、ようやく日々の生活が安定してきたなかでの自然災害で人々の落胆は大きかった。

苦小牧の経済圏を拡大するために計画されていた「観光まつり」は水害による人心の安寧策を兼ね、九月二十一日の前夜祭に引続き三日間にわたって勇払街道と新川通りの交点にあった苦小牧市役所（後に旧・市立総合病院／現・教育・福祉センター（本幸町））前広場を会場に開催された。

『南北海』から千歳音頭に関する記事を見てみよう。

九月十三日付

第一回苦小牧観光祭迫る

盛大に打上げ花火 商店街の協力態勢もOK

二十一日から繰りひろげられる『観光祭』は苦小牧初の試みとして観光協会、

市役所、会議所が一体となって豪華な『おまつりプロ』を計画(略) 外来客誘致と苦小牧市および支笏湖の宣伝との目的には相当役立つものとみられる(略)

▽まず多彩な行事部のプログラムによれば二十一日の前夜祭には午後六時から市役所広場で五間に十間の大舞台を使用して待望の「苦小牧シャンソン、千才音頭」のレコード発表会が目下振付中の踊りとともに華やかにフタをあける(略) 苦小牧シャンソンの発表を目的とする移動演芸班が錦岡、勇弘と巡回、二十三日には支笏湖に現われるスケジュールが組まれている(後略)

千歳音頭のデビューは千歳ではなく、苦小牧の観光まつり会場において昭和二十五年九月二十一日のことだった。さらに、「千歳音頭」の項で述べた九月二十三日撮影の写真、なぜ苦小牧歌謡発表会が千歳の支笏湖畔で行われ、苦小牧の女子中学生と芸妓が千歳音頭を踊っているのだろうかという疑問は、観光まつりのPRと苦小牧歌謡^{シャンソン}の発表を目的とする移動演芸班⁽²⁾が支笏湖畔で、苦小牧歌謡とともに千歳音頭を披露している写真だということがわかった。

特設会場の吊看板が「苦小牧歌謡発表会千歳音頭」となっているが不自然な文字配置である。本来は「苦小牧歌謡千歳音頭発表会」とすべきで、苦小牧市郊外の錦岡、勇弘で用いた看板「苦小牧歌謡発表会」に「千歳音頭」の文字を継ぎ足して支笏湖畔において再利用したと考えられる。会場では日本通運苦小牧の社員で構成される楽団ニュー日通の演奏もあった。

移動演芸班が錦岡と勇弘に引き続いて支笏湖畔を訪れたのは、支笏湖畔が苦小牧の奥座敷Ⅱ行政域の延長との考えを如実に物語るものである。

九月二十三日付『南北海』には観光まつり前夜祭の様子が掲載され記事中「引続いて花柳流千葉栄一氏の「苦小牧シャンソン」の踊り方、さらに花柳界のお姐さんによるシャンソン、千才音頭^{マヤ}の踊りの発表が舞台一ぱいに手さばきもあざやかに行われ・・・」とある。この記事と十三日付記事

「目下振付中」から千歳音頭の振り付けが舞踊家千葉英一によってなされたものと推測できる。⁽³⁾

註(1) 昭和三十一年からは、苦小牧港実現の見通しが明るくなったことからまつりの名称を「港まつり」に改め現在に至っている。なお、苦小牧港の開港は光輝丸、第三北星丸が入船した三十八年四月のことだった。

註(2) 観光まつりが港まつりと名を変えた後もキャラバン隊が近隣市町を巡回した。千歳においても平成七年まで市役所正面でキャラバン隊の女性が浴衣姿で「苦小牧おどり」の踊りゆかたは太平洋の波の模様がいちばん似合う・・・」を披露し港まつりをPRした。

註(3) 昭和三十四年制定の千歳市讃歌パンフレットに千歳音頭の振付図が紹介され、振り付けは札幌日の丸舞踊会・工藤倉子となっている。

レ・コード館

本論執筆中に日高管内新冠町レ・コード館を訪れ、平成十七年五月に苦小牧民報の記事に取り上げられた「千歳音頭」と「苦小牧シャンソン」をレ・コードホールで試聴する機会を得た。

レコードのジャケットは失われていた。レコードはSP10インチ盤でシングル盤(7インチ・一七センチ)に比べて直径が二五センチと大きい78回転であるため収録時間が短く、録音されていた千歳音頭は一番から四番までであった。「宣伝用レコードの作製」の項の千歳音頭の歌詞、一番がデュエット、二番、四番が市丸のソロとなっていた。また、苦小牧シャンソンは一番、三番、四番が録音されていた。

なお、新冠町はアナログレコードを音楽文化を記録した歴史遺産として後世に伝えることでまちづくりを進め、平成九年にレ・コード館を建設し現在七八万枚以上のレコードを収集している。

次項の「もう一枚の千歳音頭」＝「千歳行進曲」のほか、千歳を舞台とした旧作であるフランク永井の「札幌発最終便（S32♪・・・胸に始動のプロペラ悲し 札幌発あゝ最終便）」、東英行とカルチナの「千歳ブルース（S45頃♪霧に隠れた滑走路 今日では来るかと待ってた人よ・・・）」などの収蔵はなかった。

もう一枚の「千歳音頭」

千歳音頭に関して昭和二十五年当時の資料として写真三葉と「苦小牧シヤンソン」とのカップリングレコード一枚の四点が保存されていることは先述した。このほかに、千歳行進曲とカップリングのピクチャーレコードが保存されている。絵柄は支笏湖と恵庭岳のカラー写真となっている。

千歳行進曲 坂口 淳作詞 飯田 信夫作曲

一、千歳の流れも 清らかに 日毎に伸びる わが街よ

支笏をのぞみて 繚乱と 文化の華は ここに咲く

千歳 千歳 躍進の 一路をたどる わが郷土（二、略）

三、千歳と世界を一すじに

結ぶは 空の日航機

弾丸道路も素晴らしく 平和の盾は 自衛隊

千歳 千歳 栄光の 輝き満ちし わが郷土

千歳音頭がA面ならば、千歳音頭制作時からの人口急増でレコードの需要が増えたといえるがそうではない。レコード制作の目的は千歳行進曲を世に出すことであつたが、その理由については判然としない。

千歳行進曲の作詞は「小鹿のバンビ（♪小鹿のバンビはかわいいな・・・）」の坂口淳、作編曲は映画音楽の飯田信夫、歌手は国民的歌手・指揮者として国民栄誉賞を受賞した藤山一郎（M44～H5）だった。レコードには曲名のほか、当代の売れっ子三人の名前とビクターオーケストラとのみ記載

され制作会社名がない。

その間の事情を博信堂の松森聰は「千歳行進曲のレコードは、ビクターの役員と懇意だった社長の自主制作盤と聞いています。私が入社した昭和四十五年当時、倉庫には五〇枚ほどの千歳行進曲がありました。レコードは買い取りなどしませんから・・・。懇意にした関係から、以前はよく店の前でビクターの歌手がキャンペーンを張ったものです」と述べた。

自主制作盤のためか千歳行進曲はJASRAC（日本音楽著作権協会）の作品データベースに登録がない。

制作年は不明となっている。千歳行進曲の歌詞をヒントに制作年を類推したい。

三番の歌詞に「自衛隊」と出てくる。防衛二法が公布され保安隊が自衛隊に改組されたのは昭和二十九年七月である。さらに「日航機」も出てくる。日本ヘリコプター輸送（現・ANA）の千歳就航は同じ年の八月であつた。当時、日本ヘリコプ



写真5 ピクチャーレコード・もう一枚の「千歳音頭」
A面「千歳行進曲」も同じ支笏湖と恵庭岳の
絵柄

ター輸送は小規模な航空会社であつたが、就航した後であれば日本航空のみを歌詞に登場させることはないであろうと考え、「もう一枚の千歳音頭」の制作は就航前の七月となる。また、国際線を有する日本航空を特記したと仮定し、ある程度の幅をもたせると人口が急増した三十年前後となろう（S29住基

三二、九四二、S30国調四二、三一七)。なお、国道36号・札幌・千歳間の通称だったアスファルト舗装「弾丸道路(定山溪鉄道豊平駅踏切・千歳橋)」は二十八年十一月の竣工である。

支笏湖湖水まつり事始

支笏湖畔におけるイベントも苫小牧との協調によって始まった。

前出の長桶鎌吉が支笏湖観光のイベントについて記している(「苫小牧の観光開発とその周辺」／○内引用者補筆)。

(略) 支笏湖が国立公園の指定区域になったことにより、支笏湖をもっと内外に売り出そうということから、支笏湖観光協会、千歳観光協会、苫小牧(観光協会)の三者によって「支笏(湖)湖水まつり」をやるうじやないかと当時の千歳市役所の産業課長の米田(忠雄)後の市長、道議)さん(略)から相談をうけ、三者の意見がまとまり、昭和29年6月26、27日の二日間支笏湖畔で行われている。

内容のほとんどが苫小牧市と苫小牧(観光協会)が主体となり華々しく開幕、NHKの協賛行事(NHKのど自慢素人演芸会/現・NHKのど自慢)や苫小牧花柳界の姐さんたちによる踊りが披露されている。

2回、3回と数回共催したあと、米田さんが千歳市役所を辞められてから、湖水まつりは苫小牧からはなれて今日に至っている。

湖水まつりも千歳と苫小牧の観光協会の協調によって始まった。

湖水まつりは支笏湖に夏を告げるイベントとして定着、主催は支笏湖まつり実行委員会、千歳市と千歳観光連盟が後援となってコンサートや納涼花火大会などが催されている。昨年(平成二十二年)は七月三十一日、八月一日の二日間にあつて第六〇回支笏湖湖水まつりが開催された。六〇回とすると初回は支笏湖が国立公園に指定された翌年の昭和二十六年



写真6 第1回支笏湖湖水まつりで踊られる千歳音頭
日本は占領下にあり観客に私服姿の米兵がみえる
(昭和26年 湖畔 苫小牧観光協会提供)

となるが、第一回支笏湖湖水まつりの資料は千歳観光連盟においても見出せないという。米田忠雄は三十年四月に町長選挙出馬のため町役場を自己都合退職している。米田の退職年と長桶の回想にある「数回共催」を勘案すると湖水まつりは二十六年初回の蓋然性が高い。

湖水まつりのほかにも苫小牧観光協会では昭和三十一年からモラップキャンプ場においてキャンプファイヤーを囲んだ「湖畔の夕べ」を開催、後に千歳市主催の「モラップキャンプまつり」の嚆矢となった。

千歳音頭の普及活動と現状(あとがき)

千歳音頭はJASRACの作品データベースに「内国作品 作品コード052・7559・8 タイトル千歳音頭 著作者北郷雪夫」と登録されている。作品の管理信託状況について北郷はJASRACに著作権管理を委託せず、東辰三の著作権については死後五〇年の経過によって平成十二年に消滅した。

昭和五十四年に挙行された千歳開基(現・開庁)百年記念式典では会場となった青葉陸上競技場において七五〇人の市民が千歳音頭の踊りの輪を広げた。昭和四十五年頃までは幸町一丁目やグリーンベルト(現・わんぱ

く広場）などの盆踊り会場では早い時間帯に子どもを含む市民のために千歳音頭が踊られ、夜が更けてからは大人盆踊りとして北海盆踊りを楽しんだ。各町内会の広場においても千歳音頭が踊られ、一部においては終始千歳音頭という町内会もあったという。このようなことから市民にとっても千歳音頭は身近なものだった。さらに、一部の小学校の運動会でも千歳音頭が踊られていた。このことは異動を伴う教員が地域の踊りを覚え、児童に踊りを教えるという地道な活動があったのだろう。

昭和五十年から始まった商店街振興組合連合会（市民夏まつり実行委員会）主催の千歳市民夏まつりのフィナーレを飾る市民納涼盆踊り大会のパレードでは北海盆踊りが採用され、千歳音頭が踊られることはなかった。五十八年には千歳市制定ふるさと音頭保存会が組織され、当地音頭・千歳音頭の復活に努めたが、保存会の活動が実を結ぶことはなかった。

平成七年十二月、千歳市女性団体協議会（女性協）が市民文化センターにおいて開催した「女性の手による地域づくり推進事業「知っていますか、千歳の今昔物語」」において千歳音頭が久しぶりに踊られた。参加者の多くが千歳音頭を懐かしみ復活の機運が盛り上がった。保存会も再編され講習会も開催されるに至り、翌年の市民納涼盆踊り大会で千歳音頭は復活した。

現在も大会期間中、街頭にはリズムカルな千歳音頭が流れる。夕刻から始まるグリーンベルトの盆踊り会場では、北海盆踊りの前座として短い時間が千歳音頭に与えられているが、踊り方を知らないのか参加する市民の数は多くはない。

なぜ、千歳音頭が廃れてしまったのだろうか。

千歳は自衛隊、工業団地進出企業、航空関連企業と転勤族が多いことで知られる。ご当地の踊りである千歳音頭は、飛行機や樽前山などの形を現

すため振り付けが難しく、また、前に進んではさがるといった踊りが市内を練り歩くパレード向きではなかったことも災いしたのだろうと踊りを知る者はいう。このことから転入した市民が踊りの輪に参加することができず、踊り方が簡単で、かつ全道的に知られている北海盆踊りが定着したものと考えられる。

苦小牧においても、千歳音頭と一緒に作られた苦小牧シャンソンの踊りがパレード向きでないという理由から昭和三十五年の第五回港まつりにあわせて行進しながら踊れる「苦小牧音頭（♪山は樽前 男は気前 乙女心は苦小牧・・・）」が、さらに四十五年には港まつり市民おどりパレードのために「苦小牧おどり」が作られた。

平成二十三年二月十日付WEBみんぼう（苦小牧民報）「千歳・恵庭のニュースに次の記事が掲載された。

千歳北栄小で千歳音頭体験

千歳北栄小（四方正校長）で9日、千歳音頭体験会が開かれた。普及に努めている千歳毎床会（若崎舞邦会主）が講師を務め、子供たちに伝統の踊りを伝えた。

千歳毎床会の会員3人が、放課後子ども教室「わくわく広場北栄っ子」（毎週水曜日）を訪ねた。参加児童55人、ボランティア12人も体験した。

樽前山や恵庭岳、飛行機も登場する千歳らしいユニークな振り付けを、分かりやすく手ほどきした。3年の大寺利香さんは「子どもも盆踊りは踊ったことがあるけど、千歳音頭は初めて。難しかった」と感想を話していた。

放課後子ども教室を担当する市教育委員会では、「時間も三〇分と短く子ども達の興味を引いたかは分からないが、事情が許せば夏まつり前にもう一度時間を採りたい。延いては子どもたちが夏まつりの千歳音頭の輪に入ってくれたならば普及に一役買うことになるのだが」という（わくわく

ひろばでは七月二十日にも児童八〇人が千歳音頭を習った。

千歳毎床会のほか、長年にわたって千歳音頭の普及に係わってきた女性協の地道な活動が波紋となり、一部町内会等では復活しつつある。

千歳市老人クラブ連合会（市老連）も今年（平成二十三年）になって取り組みを始めた。五月二十六日に開かれた市老連主催の会員芸能チャリティショーのフィナーレにおいて、市民文化センター大ホールの舞台いっぱいには和服姿の女性を中心に四〇人以上の会員による千歳音頭が披露された。曲は録音時間が短い市丸と鈴木が歌うオリジナルなものではなく、千歳の民謡団体・千鳥会の荳津お江さんと坂野ハル子が六番までの歌詞をフルに歌うものだった。筆者は初めて目にした千歳独自の踊りに感動すら覚えた。踊りは振り付けを少しアレンジしたのか、結構前に進むものだと感じた。市老連ではちとせタウンネットの協力を得て、今年の町内会盆踊り大会での復活を狙っている。

いつの日か、以前のように明るい曲調の千歳音頭に合わせた踊りの輪がまち全体に広がることを願い本論を閉じたい。

註（一）音源は昭和五十四年の開基百年記念式典で千歳音頭を踊るために作られたもので、踊りが途切れないよう三〇分間ほどエンドレスで吹き込まれた。演奏は陸上自衛隊第七師団第七音楽隊が全面的に協力した。現在、市内に流れる千歳音頭は、この時のテープがルーツとなっている。

引用・参考文献

苦小牧市『苦小牧市史 下巻』昭和五十一年／『苦小牧のあゆみ・市制

五〇周年記念』平成十年

苦小牧観光協会『30年のあゆみ とまこまい観光の年輪』昭和五十五年

高橋長助『国立公園支笏湖沿革史』草稿 昭和四十七年

室蘭市『新室蘭市史 第6巻』平成十九年

千歳市『千歳市史』昭和四十四年／『要覧ちとせ』各年

丸駒温泉旅館『原始の森と湖に：支笏湖丸駒温泉旅館80年』平成七年

『北海道新聞』／『南北海』『苦小牧民報』『千歳民報』

千歳町・千歳観光協会 支笏湖関連各種パンフレット

協力

苦小牧観光協会

苦小牧市

苦小牧市博物館（苦小牧市教育委員会）

レ・コード館（新冠町教育委員会）

博信堂（松森聡）

苦小牧民報社報道部

坂野ハル子（千歳市）

ちとせタウンネット

千歳市老人クラブ連合会

千歳観光連盟

『新千歳市史 通史編上巻』好評発売中

各分野の研究者32名と一機関の執筆による

新たな視点による「新たな千歳市史」

千歳の自然や気候、先史時代から終戦までの歴史を詳述しています。

A4判全1,026ページ、箱ケース入り、一冊3,500円

市役所総務課で販売しているほか、郵送でも購入できます。

郵送の場合、送付先（住所、氏名、電話番号）を明記し、本体代金と郵送料（道内800円、東北1,000円、そのほか1,150円）を現金又は定額小為替でお送りください。

申込先は、

〒066-8686 千歳市東雲町2丁目34

千歳市総務部総務課文書統計係



あとがき

昨春にオープンした防災学習交流センター「そなえー」は、地震の揺れや煙の中での退避行動を体験できる展示スペースなどで構成されている。一年間の来館者は予想を大きく超える四万人に近いものとなった。小さな子どもでも楽しみながら学習できる仕掛けがなされ、多くの人で賑わっている。

そなえーの南側・東10線附近にあるトメト川（原名ツメムナイ川二つの・泉地・川）の水源となっているトメム（二つの・泉地）と呼ばれる泉の周りが、河川災害訓練広場、土のう訓練広場などとして整備された防災キャンプ場として七月にオープンした。防災学習交流施設の一部であることから直截的に「防災の森」と呼ばれている。

この湧水の谷痕の源はナイベツ川の上流近くまで遡れる。北部隊の西・道央自動車道の東側で明治二十九年陸地測量部の地図にあるポロコツ（大きな・窪地）となる。ポロコツは市街地においては大部分が埋め立てられていて明治の地形は僅かに、北部隊格納庫裏、北斗中学校南側、信濃小学校校地とその東側、中央大通に面した信濃四丁目に名残を留める。下って湧水してメムをつくり流れとなる。

メムの傍に街道が通っていた。街道を「ヲサツ道（旧・長都街道）」と呼ぶ。この道筋は千歳川会所があった千歳橋南側から北に向かい北栄の坂下に沿

い千歳線高架を潜る。坂を上って農協支所附近まで進み、以後は斜めに末広小・富丘中・武道館と進み防災の森を経て、千歳川と漁川が合流するイザリブトに至る六里の道だった。

ヲサツ道は幕府が東蝦夷地を上知したことによる直捌によって、千歳川沿いで獲れたサケをユウフツに運ぶための道だった。シコツを千歳と改めた文化年間に、ビビ山道（千歳越え）とともに開削された歴史をもち今も数箇所に残影がある。

ヲサツ道は幕末の探検家松浦武四郎の『竹四郎廻浦日誌』の地図にも表れる。

以前はメムに吹く風に江戸時代の風景を感じることもできる程に静寂が漂っていたが、新しい役割を担い遊具が置かれたメムにそれを感じることは難しい。しかし、震災をはじめとする多くの自然災害とともに生きる我々にとって防災の体験と演練は、「人は学んだ以上のことではできない」といわれることから大きな意味を持つことだろう。

千歳において江戸期の歴史に触れることができる場所は少ない。千歳の歴史と文化を次代に伝えることは大切なことである。防災の森の一角に旧・長都街道とトメムの湧水の由来を紹介する案内板が立てられた。施設における体験と演練、そしてメムに憩うことによって千歳の歴史の一端に触れることができるようになった。

(M)

志古津の原稿を募集します

戦後の千歳に関する内容で、十分考証を行い批判に耐えうるものとし、四〇〇字詰原稿用紙二〇枚以上を基本とします。審査の上、掲載を決定し、採用の場合には報酬をお支払いします。

執筆を希望される方は、「執筆要領」等をお知らせしますのでお問い合わせください。

志古津 第14号

『新千歳市史』機関誌

平成二十三年九月

発行 千歳市

〒〇六六・八六八六

編集 千歳市総務部総務課

TEL 〇一二三（二四）三一二三

内線二四七

印刷 千歳印刷株式会社

北海道千歳市錦町三丁目三番地

※ 本誌の内容は、千歳市ホームページでも見るができます。
<http://www.city.chitose.hokkaido.jp>
「メインページ」→「教育と文化」→「文化財・歴史」